



浮世絵展

— 隅田川でたどる江戸の暮らしと文化 —

ごあいさつ

このたび、当館では北茨城市出身のコレクターによる浮世絵のプライベートコレクションを紹介する企画展を開催します。

江戸時代後半から明治時代にかけての爛熟期^{らんじゅく き}を迎えた浮世絵の精華^{せい か}を示す同コレクションは、隅田川^{すみ だ がわ}流域^{はぐく}が育んだ豊かな暮らしと文化を今に伝えています。それらは失われた江戸の風景をあらわすと同時に、絵の中には花見やファッションを楽しむ人々の様子が息づいています。江戸の人々の姿からは、現代を生きる私たちの暮らしにも通じるものを見出すことができるでしょう。

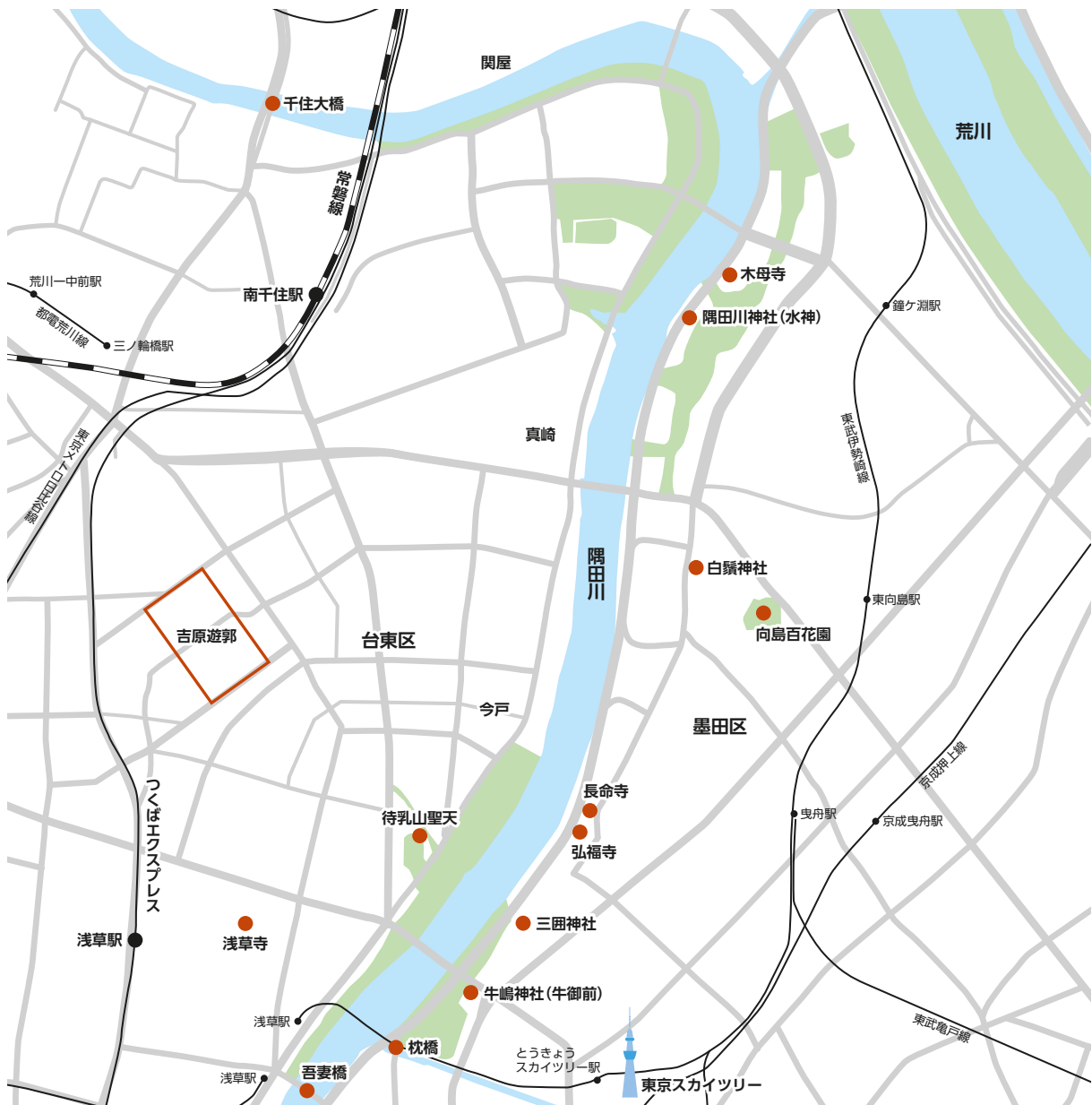
歌川^{ひろしげ}広重^{ひろしげ}があらわした隅田川の名所をはじめ、“奇想^{き そう}の絵師”歌川^{くによし}国芳^{とら}が捉えた人々の暮らし、江戸の町民から絶大な人気^{ほこ}を誇った歌川^{くにさだ}国貞^{くにさだ}から明治の世に活躍^{かつやく}した月岡^{よしとし}芳年^{きよちか}、小林清親^{きよちか}まで浮世絵約250点を紹介しながら、華やかな江戸文化へのご案内します。

最後になりましたが、貴重な作品をご出品いただいたご所蔵家、ご支援を賜りましたパートナー企業の皆様をはじめ関係各位に厚く御礼を申し上げます。

令和7年4月

茨城県天心記念五浦美術館

本展出品の浮世絵に描かれた隅田川の名所



* 地図は現在のもので、江戸時代後期のものとは異なる。

* 牛嶋神社は江戸時代には弘福寺付近に位置した。

第1章 ようこそ隅田川へ

都が京都にあった古来より、隅田川は東国有数の歌枕として知られていました。特に『伊勢物語』「東下り」の段で、在原業平^{ありわらのなりひら}が「名にし負はば^お いざこと問はむ^{みやこどり} 都鳥^{みやこどり} わが思ふ人はありやなしやと」と隅田川の都鳥（ユリカモメ）を歌に詠んだことはよく知られています。近世に入り、江戸の経済を支える市中最大の河川として発展を遂げた隅田川は、交通の要衝地^{ようしゅう}となったばかりでなく行楽地としても親しまれ、浅草^{あさくさ}や待乳山^{まちちやま}、三囲神社^{みめぐり}といった観光名所は多くの人で賑わいました。また浮世絵の絵師、彫師^{すり}、摺師も周辺地域に集い、流行の発信地となりました。

本章では、隅田川流域の様子を伝える浮世絵作品を紹介します。一枚の風景画として隅田川を捉えたものから、花見や舟遊びを楽しむ人々の姿にスポットをあてるもの、あるいは風景と美人を組み合わせたものまで、その豊かな表現をお楽しみください。



歌川広重「東都名所隅田川の花 同向島名所一覽」安政元（1854）年 大判三枚続

浅草から向島^{ちやうかん}方面を鳥瞰して隅田川流域が描かれています。帆船や屋根舟^{いくそう}が幾艘も行き交い、往来する人々の賑わいを伝えます。手前中央には待乳山（莫土山）、対岸には三囲神社（三囲いなり）、牛嶋神社（牛の御前）など、様々な名所が描かれています。対岸一帯を桜が彩っていますが、堤をよく見ると花見に興じる人々も細かく描き込まれています。



けいさいえいせん 溪斎英泉「江戸八景 隅田川の落雁」弘化（1844-1848）頃 大判

中国の瀟湘八景にならって江戸名所の八景をシリーズにしたもので、本図は瀟湘八景の平沙落雁にかけています。雁が飛び行く先、遠くに見えるのは筑波山です。「西の富士、東の筑波」として、江戸時代から人々の信仰を集めていました。



二代歌川広重「東都三十六景 隅田川 三囲り堤」文久2（1862）年 大判



二代歌川広重「江戸名勝図会 永代橋」文久2（1862）年 大判



歌川国貞「江戸八景ノ内 隅田つゝみの晴嵐」弘化（1844-1848）初期 大判三枚続



歌川国芳「当盛江戸鹿子 永代橋ノ景」
天保（1830-1844）前期 大判

江戸鹿子とは、鹿の斑点のように模様を出す染織の技法「鹿の子絞り」の上方での呼び名です。江戸時代の地誌『江戸鹿子』は、関東一帯を布地に見立て鹿の子のように所々の地域を取り上げるものですが、国芳の本シリーズもまた名所を左上のコマ絵に描きながら、女性の全身像と組み合わせています。本図はコマ絵に永代橋の欄干と佃島を、手前には料亭の給仕らしき女性を描いています。



歌川国貞「扇合隅田川八景 橋場の春雨」
弘化（1844-1848）初期 大判

隅田川兩岸の景勝地を扇形の枠内に描き、女性の全身像と組み合わせた全八図のシリーズです。隅田川の「橋場の渡し」とは、真崎と白鬚を繋ぐ渡しです。扇形に描かれる風景は、真崎あたりから対岸の水神の森を捉えたものです。女性は竹竿と桶を使って水を汲んでおり、正月の水汲みの様子が描かれます。水の流れる様を雨に見立てて「春雨」としたのでしょう。



歌川国芳「忠孝名誉奇人伝 其角」

弘化2（1845）年頃 大判

忠義や孝行、名誉といったものをテーマに歴史上の人物をとりあげるシリーズです。「其角」とは江戸前期の俳人、宝井其角を指し、本図の画面上部に其角の句「夕立や 田をみめくりの 神ならは」を示しますが、其角その人は描かれませんが、三囲神社には、其角がこの句を詠んだ翌日に雨が降ったという伝承があり、これに因んで、舟上の女性が傘をさして雨をしのぐ一場面を描いています。



二代歌川国貞「隅田川岡の賑ひ」安政3（1856）年 大判三枚続

江戸時代、幕府公認の遊郭は吉原のみで、それ以外の遊郭を岡場所といいました。安政2（1855）年の江戸地震は隅田川流域に甚大な被害をもたらし、吉原遊郭は仮宅での営業を余儀なくされます。本図は都鳥の戯れることから、隅田川沿いであると分かりますが、仮宅に移った吉原の遊女を描いたものでしょう。中央の遊女のもとには禿が書簡を届けています。

第2章 国芳、国貞が描く美人とファッション

浮世絵はその黎明期より遊女や芸者を好画題とし、そうした女性を描く「美人画」は重要なジャンルとして多くの作品が生み出されました。本章では、歌川豊国門下で人気を二分した国芳・国貞の作品を通じて、江戸後期における美人画の表現を紹介します。この時期は奢侈禁令を掲げる天保の改革により、浮世絵の表現にも統制がかかり遊女や芸者を描くことが禁じられます。しかし絵師たちは法の目をかいくぐるように、知恵を絞って何かしらのテーマにかこつけて美人画を描く口実を模索しました。新しいものの好きの江戸っ子の需要に応えるため、最新のファッションを反映させることに趣向を凝らした浮世絵からは、当時の着物や髪型のトレンドをうかがうことができます。



歌川国貞「春遊娘七草（七草爪）」
弘化（1844-1848）頃 大判

「春遊娘七草」は春の七草を中心とした正月の行事を美人とともにあらわした全七図の揃物です。本図の女性は身をかがめて鉢で爪を切っており、手前には水を張った盥が置かれています。これは七草爪という風習で、正月七日に七草を浸した水をつけて爪を切ることで、その一年はいつ爪を切っても問題なく過ごせるというものでした。



歌川国貞「相撲人形花の取組 不知火諾右衛門」
弘化（1844-1848）頃 大判

人気のあった力士の操り人形を口実として美人の半身図を描くシリーズです。本図に描かれた人形のモデルは、肥後出身で熊本藩のお抱え力士として活躍をした不知火諾右衛門です。天保11（1840）年に八代横綱の免許を受けており、人形にも化粧まわしの上には綱が見られます。



歌川国芳「江戸自慢^{とうせい じいれ}程好仕入 ごばん嶋」
弘化4～嘉永元（1847-1848）年頃 大判

コマ絵に芝居の一場面を描き、それに因んだ染織の名を題とする全5図のシリーズです。右上には着物を包むたとう紙の形で題枠をとり、国芳のパトロンであった梅屋鶴壽の狂歌「金閣寺 かたるしかけの 碁盤しま 名よせのふみも 白黒の星」が添えられています。コマ絵は歌舞伎「祇園祭礼信仰記（金閣寺）」で碁の勝負に負けて碁盤を蹴散らす松永大膳^{だいぜん}をあらわし、碁盤縞模様の着物の女性もまた碁を打っています。



歌川国芳
「山海愛度図会^{めでたい ずえ} けむつたい 丹波赤かゐる」
嘉永5（1852）年 大判

諸国の名産をコマ絵で紹介しながら、「～したい」というテーマで美人画を描くシリーズです。国芳の長女・芳鳥女が担当したコマ絵には、当時食用として用いられたアカガエルを捕える場面が描かれています。前景には竈^{かまど}の煙に思わず仰け反る女性^のの様子が描かれ、噴き出す煙の描写が女性の後頭部まで及んでいます。

第3章 歌舞伎役者は江戸の顔

いづもの おくに
出雲阿国の創始とされる歌舞伎は、江戸の人々にとって一大エンターテインメントでした。人気の高い役者の浮世絵は需要も多く、全身像を描いたものから、大首絵とよばれる半身を描いたものまで、様々な役柄に扮した役者絵はいわばブロマイドとして求められました。

しかし天保の改革は美人画のみならず、役者絵も禁じて風紀の取り締まりを図りました。そのため天保、弘化年間の役者絵は特定の役者の似顔^{にがお}を描くことができず、役者名を不記載としたり、あるいは子どもの姿に仮託して描いたりするなどして工夫を凝らしました。禁令がゆるんだ^{かえり}嘉永期になると似顔の特定できる役者絵がまた流通し始め、役者絵が復興を果たします。



歌川国芳

「繪鏡台見立三十木花撰^{ぼくかせん} 忠兵衛 梅川」
弘化（1844-1848）頃 大判

芝居の人物を鏡の中にあらわし、額縁に関連する植物で飾りながら、狂歌を添えるシリーズです。描かれているのは近松門左衛門作「冥途^{めいど}の飛脚^{ひきやく}」の飛脚問屋・亀屋忠兵衛です。鏡の縁を飾る梅は、忠兵衛が入れ込んだ遊女・梅川を暗示しています。公金を横領した忠兵衛は梅川とともに逃避行に出るという破滅の道を選びます。本シリーズが制作された弘化年間は役者の似顔絵を描くことが禁じられていたため、特定の役者を当てていません。



歌川国芳「荒獅子男之助」

嘉永2（1849）年 大判

嘉永2年、八代目市川團十郎は河原崎座上演の「伊達だて競阿国くらべおくに戯場かおき」で一人七役を務めます。本図に描かれるのは、床下警護にあたった荒獅子男之助が、怪しげな鼠を捕えようとする「床下」の場面。鉄扇を振り上げる男之助の迫力を示しながら、逃げる鼠の尻尾だけを描いています。このあと、妖術をとき鼠から人間に戻ったにつきだんじょう仁木弾正のせり上がりが見せ場です。



歌川国貞「江戸名所図会八 新吉原 花川戸助六」

嘉永5（1852）年 大判

桜満開の吉原を背景に、「助六由縁江戸桜（通称：助六）」の主役助六を演じる八代目市川團十郎が大首絵で描かれています。「助六」は先代の七代目團十郎が市川家のお家芸として選定した「歌舞伎十八番」のひとつで、吉原を舞台とした本演目に江戸の人々は熱狂しました。江戸紫の鉢巻を頭に締めた助六は、市川家の替紋である杏葉牡丹ぎょうようぼたんを胸元にあしらった黒羽二重くろはふたえを着ています。

第4章 浮世絵を“読む”

浮世絵に“何が描かれているのか”を読み解くことは、浮世絵鑑賞の楽しみのひとつです。例えば広重、国貞、国芳ら当時人気を誇った三絵師による合作「東海道五十三對」は、各宿場にゆかりの風俗や物語を描く作品で、付された詞書の内容とともに鑑賞者が絵をみる^{つい}ことが期待されています。また浮世絵には、画中の題材に様々な物語や故事を重ねる^{ことばがき}見立^{みたて}の手法が好んで用いられます。天保、弘化年間には道德教育を重んじる天保の改革の影響で、模範とすべき歴史上の女性に見立てて美人を描く作品なども登場しました。

そのほか、浮世絵では記紀神話や平家物語、源氏物語など様々な題材が主題とされました。逆にいえば、そうした知識や物語が江戸の文化内で共有されていた証でもあります。本章では、江戸の深い教養に裏付けされた、浮世絵の幅広い表現をご紹介します。



歌川広重「小倉擬百人一首 中納言兼輔 狐葛の葉 安部童子」 弘化（1844-1848）頃 大判

小倉百人一首を様々な説話や風俗に見立てたシリーズで、絵師として広重、国貞、国芳の三者が参加し、戯作者・柳下亭種員^{りゅうげいかていたねりこ}が詞書を付しています。本図は、会うことのない恋心を詠んだ藤原兼輔の「みかの原わきて流るる 泉川 いつ見きとてか 恋しかるらむ」を葛葉伝説に見立てます。描かれているのは、女性の姿に化けた狐が我が子を残して立ち去る、母子の別れのシーンです。



歌川国貞「源氏後集余情 発端 石山寺源氏の間」 安政5（1858）年 大判

源氏物語五十四帖をもじった題による本シリーズは、江戸末期に刊行された柳亭種彦作・国貞挿絵による『修紫田舎源氏』との関連が指摘されています。『発端』とする本図に描かれるのは、まさに文台で源氏物語を執筆中の紫式部です。滋賀大津の石山寺には式部が源氏物語を起筆したとの伝承があり、今日も「源氏の間」として部屋が残っています。



歌川国芳「賢女烈婦伝 ^{ときわごぜん} 常盤御前」
天保13（1842）年 大判

平家物語で知られる常盤御前は源義朝の側室として今若、乙若、牛若の三子を設けました。本図は平治の乱で義朝が討たれた後、正体を隠すように幼子と雪路を逃げる常盤御前を描いています。よく見ると吹雪ではためく着物の隙間から、今若、乙若の姿が見えます。後の義経、牛若はというと、母の懷に抱かれ、青衣で包まれた頭部だけがのぞいています。



歌川国芳「東海道五十三對 ^{ついで} 桑名」
天保14～弘化4（1843-1847）年 大判

桑名宿は現在の三重県桑名市に位置しました。地名にかけて描かれるのは、船乗り桑名屋徳蔵と大坊主の間答で知られる逸話です。大晦日に船を出してはならないという禁令をやぶり航海に出た徳蔵は、荒れ狂う海上で大坊主と遭遇します。「怖くないのか」と尋ねる大坊主に対して、徳蔵が「世の中の方がよほど怖い」と答えると、大坊主は退散したといひます。

第5章 江戸から東京へ

明治元（1868）年、およそ260年の長きに渡った江戸時代が終わり、新しい時代が到来します。江戸から東京へと都市の風景が生まれ変わるなか、浮世絵に描かれる人々の装いにも変化があらわれます。また小林清親^{きよちか}の作品に代表されるように、光の描写を取り入れた革新的な浮世絵表現も登場します。

しかし、明治改元によって人々の生活が一気変わったわけではありません。観光名所をたずねたり、隅田川の花見を楽しんだりする人々の姿は昔と同じように浮世絵に描かれており、江戸文化と地続きであることを思わせます。本章では、楊洲周延^{ようしゅうちかのぶ}、小林清親らを中心に、近代の浮世絵を紹介します。



小林清親「向島桜」明治13（1880）年 22.8×35.0cm

桜のシーズンが到来した向島の景観を捉えています。隅田川の向こうには、浅草寺の五重塔ごしに富士^{そび}が聳えています。花見を楽しむ人々の様子からは、江戸時代と変わらない隅田川の賑わいが伝わってきますが、髷^{まげ}の男性と断髪した男性がともに描かれるほか、洋風の帽子をかぶった男性の姿も画面からうかがえ、時代の移り変わりを思わせます。



尾竹国一「東京十二月之内三月 向島春景」明治34（1901）年 21.4×29.6cm

東京の名所と美人を組み合わせた十二月から成るシリーズです。三月の図はコマ絵に向島で花見を楽しむ人々の姿を捉え、前景には稚児鬘に雛人形を手にする若い娘を配し、季節にちなんだ組み合わせとなっています。



楊洲周延「見立十二支 丑 向島牛島神社」
明治27 (1894) 年 大判



楊洲周延「見立十二支 酉 浅草田圃^{たんぼ}酉の市」
明治26（1893）年 大判



高橋松亭「すみ田川」

大正13～昭和2（1924～1927）年 37.7×17.0cm

企画展「浮世絵展—隅田川でたどる江戸の暮らしと文化—」リーフレット

会 期	令和 7 年 4 月 26 日(土)～6 月 8 日(日) 前期: 4 月 26 日(土)～5 月 18 日(日) 後期: 5 月 20 日(火)～6 月 8 日(日)
主催・会場	茨城県天心記念五浦美術館
後 援	朝日新聞水戸総局／茨城新聞社／NHK 水戸放送局／産経新聞社水戸支局／東京新聞水戸支局／ 毎日新聞水戸支局／読売新聞水戸支局／LuckyFM 茨城放送／北茨城市／北茨城市教育委員会
編集・発行	茨城県天心記念五浦美術館 ©2025
執筆・構成	茨城県天心記念五浦美術館 副主任学芸員 塩田 稔雄 ※本展出品作の多くは、2020 年にたばこと塩の博物館で開催された企画展「隅田川に育まれた文化 浮世絵 に見る名所と美人」で紹介されました。本リーフレット執筆にあたり同展図録を参照しました。
制 作	光和印刷

本展はパートナー企業からの支援を受けています。

株式会社常陽銀行／関彰商事株式会社／ザ・ヒロサワ・シティ／株式会社アダストリア／茨城県近代美術館友の会／
関東鉄道株式会社／イオンモール株式会社／茨城交通株式会社／茨城県信用組合／茨城トヨタ自動車株式会社／
茨城トヨペット株式会社／学校法人リリー文化学園／沼尻産業株式会社／水戸ヤクルト販売株式会社

【表紙掲載作品】①歌川国貞「江戸八景ノ内 隅田つゝみの晴嵐」弘化（1844～1848）初期／②歌川広重「東都名所隅田川堤の花 同向島名所
一覽」安政元（1854）年／③歌川国芳「当盛江戸鹿子 永代橋ノ景」天保（1830～1844）前期／④歌川国貞「扇合隅田川八景 橋場の春雨」
弘化（1844～1848）初期／⑤歌川国芳「江戸自慢程好仕入 ごぼん嶋」弘化 4～嘉永元（1847～1848）年頃（いずれも部分）